

イデックスオイルレポート ~For a week~

2023/1/20 (株)新出光

【概況】<米原油在庫増~中国コロナ緩和による経済活動再開か?>

●13日、今週は、中国のエネルギー需要の先行きを巡る楽観的な見方から原油買いの流れが継続。中国当局による新型コロナウイルス防疫措置の緩和を受け、経済活動の正常化への動きに伴うエネルギー需要回復への期待が強まっています。自動車登録台数の多い中国15都市では道路交通量が前週比で30%超の増加になったとも伝わり、こうした中、相場は79.86ドルへ続伸しました。

●16日、ニューヨーク原油市場は、キング牧師生誕記念日のため休場。

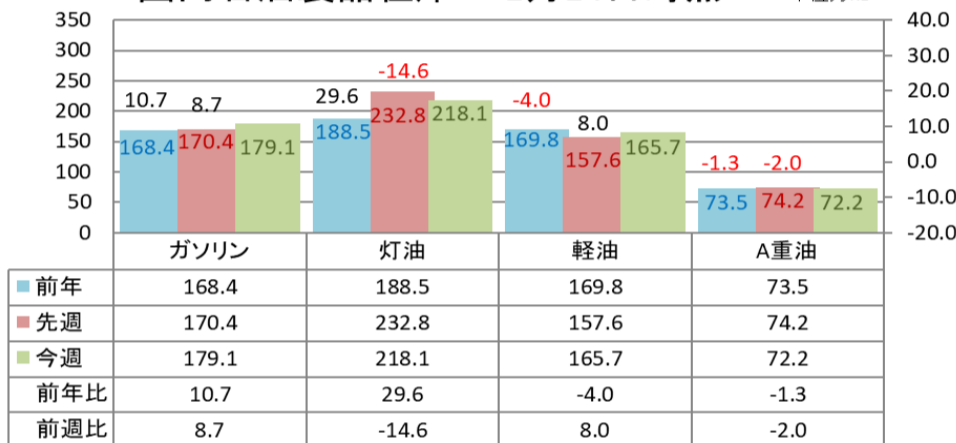
●17日、朝方は買いが先行。2022年の中国の国内総生産(GDP)が実質ベースで前年比3.0%増となり、伸び率が21年の8.4%から急減速したことが明らかになったものの、市場予想ほど弱くなかったと受け止められたもようです。また、厳格な新型コロナウイルス感染対策の緩和で、春節(旧正月)休暇中の人の移動が活発となり、燃料需要が上向くと期待が相場を押し上げ一時81ドル台へ上昇しましたが、1月のニューヨーク州製造業景況指数の悪化を眺め、景気の先行きに対する警戒感が再燃しリスク資産の株売りや基軸通貨のドル買い戻しが進む中、原油にも利益確定売りの動きが台頭し相場は80.18ドルへ続伸しました。

●18日、相場は前日まで8営業日続伸していた反動から利益確定の売りが先行しました。米株式相場が下げに転じたことで、投資家のリスク回避姿勢が広がり、原油にも追随売りが広がり相場は79.48ドルへ9営業日ぶりに反落しました。

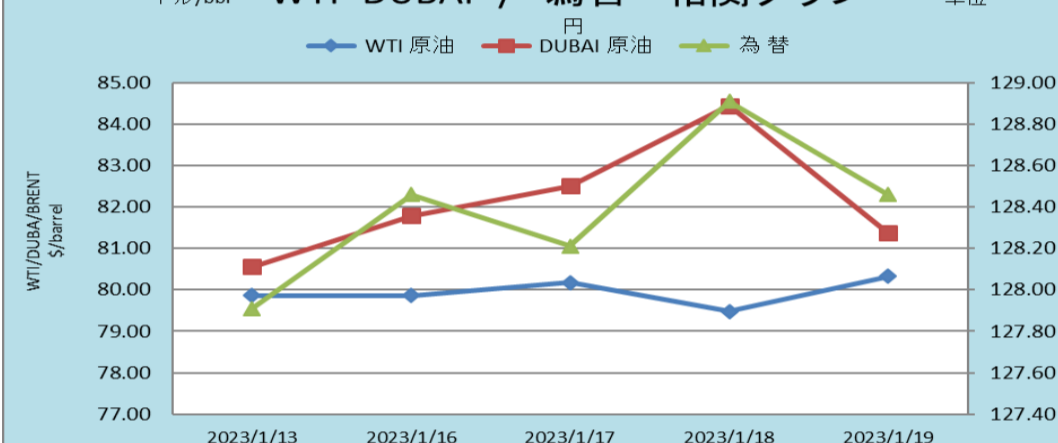
●19日、米エネルギー情報局(EIA)が午前発表した週報によると、13日までの1週間の米原油在庫は前週比840万バレル増の約4億4800万バレルと、2021年6月以来の高水準となりました。市場予想(60万バレル減=ロイター通信調査)を覆す大幅な在庫積み増しを受けて、市場では需給の緩みに対する警戒感が台頭。利益確定の売りも重なり、相場はマイナス圏に沈む場面もあった。ただ、売りに巡っては安値拾いや見直し買いが入り、プラス圏に切り返しました。中国の新型コロナウイルス防疫措置解除後の経済活動再開に伴うエネルギー需要回復への楽観的な見方が広がっていることが支援要因。国際エネルギー機関(IEA)のビロル事務局長が19日、中国経済の回復に加え、制裁下でロシア石油企業の苦境が続く影響で、今年は市場がさらにタイトになるとの見通しを示したとの伝わり、上昇余地を見込んだ買いが入り相場は80.33ドルへ反発しました。

1月20日 16:00現在 WTI原油 80.67ドル 為替 1ドル 129.71円

国内石油製品在庫 1月14日時点 単位万KL



ドル/bbl WTI・DUBAI / 為替 相関グラフ 単位



【製品卸価格】<月末に向けさらなる販売競争激化の様相>

	次回元売変動予測	
	1/26~	元売変動予測
ガソリン	→	-0.7
灯油	→	-0.7
軽油	→	-0.7
A重油	→	-0.7
LSA	→	-0.7

※激変緩和補助金「-17.5円」
※現時点での予測です。

《今週》今週の元売り仕切り改定は、3社ともに原油コストは、「+0.5円」、補助金は、「-14.8円」、都合「+1.3円」の値上げ改定となりました。資源エネルギー庁の公表する全国レギュラーガソリンの16日時点の小売価格平均は168.2円となっております。

《1月21日以降》次回の元売り改定は、原油コストは、「+2.0円」、激変緩和補助金は「-17.5円」の見込みで、都合「-0.7円」の値下げ改定の予測となっています。19日からは、1.3円の値上げ改定になりましたが、市況連動玉を持つ業者の提示はスライドだったため市況はまったく改善されませんでした。販売業社は、枠消化を優先しさらに口銭を削り販売を続けているためジリジリ市況は下落しています。2月2日からの改定では、サウジ調整金-1.8円が加味されるため値下改定が見えています。そのため月末近くは逆仮需が発生しオーダーが2月2日以降に先送りされる可能性が高いです。月末に向けては販売枠を残した業者間の販売競争がさらに激化していくものと思われます。

【次世代エネルギー】<世界初、可視光エネルギーを用いてアンモニアを合成>

東京大学・九州大学・大同大学の研究グループは、常温常圧の温和な反応条件下で、可視光エネルギーを用いて窒素ガスからアンモニアを合成することに世界で初めて成功したと発表されました。再生可能エネルギーである可視光エネルギーをエネルギーキャリアとして期待されるアンモニアの形で貯蔵することが可能になる。アンモニア(NH3)は取り扱いの容易さ、高いエネルギー密度、燃焼してもCO2を排出しない(ゼロエミッション)ことから、エネルギーを輸送・貯蔵する手段であるエネルギーキャリアとして有望視されている。しかし、現状のアンモニア合成法は、1910年代に確立されたハーバー-ボッシュ法であり、これは高温・高圧(400-600℃、100-200気圧)の非常に厳しい条件を必要とする。また、大気中の窒素と反応させる水素ガスの製造に多量のCO2の排出を伴う上に多くのエネルギーが必要で、地球上で全人類が消費するエネルギーの数%を占めていると言われています。

今回、研究グループは、光触媒を用いて可視光エネルギーを利用できれば、化学エネルギーに依らないアンモニア合成ができるのではないかと考えて詳細な検討を行った。その結果、モリブデン触媒とイリジウム光酸化還元触媒を組合せて、窒素ガスと水素供与体としてのジヒドロアクリジン(ジヒドロベンゾイミダゾール)を可視光照射下で反応させることでアンモニア合成反応が進行することを発見した。窒素ガスとジヒドロアクリジンの反応は、生成するアンモニアより原料の持つ化学エネルギーの方が低いので、外部からエネルギーを与えない通常の熱反応では進行しない。しかし、光触媒が可視光エネルギーを吸収し、そのエネルギーを用いて水素供与体であるジヒドロアクリジンを活性化することで、モリブデン触媒上でアンモニア生成反応が進行することが可能になったとの事。この研究により、再生可能エネルギーである可視光エネルギーを化学エネルギーの形でアンモニア中に蓄えることが可能であることが示された。再生可能エネルギーを用いてCO2を排出しない方法で生成された水素(グリーン水素)を原料としたグリーンアンモニアの開発につながる重要な指針として期待できるとの事。

[出典]

① <https://www.newssalt.com/35853>